「観光と記憶―韓国地方都市の歴史跡を中心として―」

朴祥美・早稲田大学高等研究所准教授

１．調査経緯

２００９年夏休みにたまたま寄り道した都市。町自体が博物館的な印象を与える郡山には、植民地時代の建築と町並みが数多く残っており、都市史、建築史、植民地史専攻者の興味を引く。植民地時代の跡がここまで残された、あるいは残らざるを得なかった理由、そして遺跡保存と開発をめぐった歴史の再構成について語りたい。

２．郡山市の地理的・歴史的位置

植民地時代、活発な港都市。米生産力（洞の名称に「米」を使ったところが多い。たとえば、蔵米洞〔チャンミドン〕、米龍洞〔ミリョンドン〕など。）住民の殆どはお仕事やビジネスのチャンスを求めて訪れた移住者。定着というより「稼いで故郷に戻る」。

３．セマングム事業をめぐったトラブル

全羅北道の西海岸に面している群山、金提、扶安の沖前を繋ぐ防潮堤の内側に新しい土地や湖を建設することで干潟と海を土地に転換する干拓事業。埋立用地を工業、商業、都市用途に使うための計画が推進中。

当事業の賛成派：国土拡張、優良農地の造成、総合観光圏形成、交通環境の改善、地域経済の活性化。反対派：環境団体は、開発による膨大なる領域の干潟と海洋生態系の破壊を懸念し、政府を相手に訴訟をおこす。

４．観光事業の推進

郡山市観光振興課では、シティーツアーを提供し、近代文化遺産とセマングム防潮堤を連携した探訪コースを運営している。

５．スライドの説明

旧税関、旧朝鮮銀行、旧長崎 18 銀行、敵産家屋と町並み（旧広津家屋、屋根、長屋、小道、神社跡、お寺、城郭、「歌舞伎座」、東国寺〔元金鋼寺〕など)、解放後の変容。

６．遺跡保存と開発をめぐった賛否両論。

韓国『中央一報』の記事「群山日本式家屋―保存するか開発するか―」（2008 年 1 月 15 日掲載)。日本語版記事に載ってある（日本人）による書き込みも興味深い。

７．後記

不動産屋からの情報：開発計画が及ぼした影響など。